2016年　第3回　8/5

「悪化した人間関係を修復する実力」

本当に毎日すごい猛暑でお仕事なさるのも大変な季節だと思うんですけど、どうぞ健康に気をつけて頑張ってもらいたいと思います。今日のテーマは、悪化した人間関係を修復する実力ってことで、堅苦しいような題名でこんな暑苦しい時にまたこんな暑苦しいテーマで恐縮なんですけども、実際やっぱり人間関係で色々悩み苦しんでいる人が非常に多いので一度こういう話も聞いておいてもらいたいという風に思っているわけであります。

レジメに従って進めさせて頂きたいと思うんですけど、なぜ人間は仲良くしないといけないのかって、非常に基本的な問題なんですけど。なぜ憎しみ合い対立して、また殺し合い、戦争する…そういうことがなぜ人間としていけないのかっていう、そういう根拠も知っておいてもらいたいという風に思うわけであります。

現実には対立も多いし、憎しみ合いも多いし、現実に戦争も世界であっちこっちでされている状況なんですけど、対立はなくならないとか、戦争もなくならないと言う方もいらっしゃるんですけど、それをどうしたら一体醜い恐ろしい戦争、殺し合いをなくすことができるんだろうっていうのも、やっぱり誰もが考える現実的なテーマじゃないかと思います。

戦争をする、殺し合うということがだめなのか、そういう根拠をちゃんとわかっておいてもらいたいと。我々の命というものから湧いてくる命の欲求というのはどういうものかっていう、どんな人でも命の根底から湧いてくる欲求として、「できることならみんなと仲良く信じあって生きてきたい」って気持ちを持ってるんですよね。対立とか憎しみとか、そういう心情っていうのもあるんですけど、だけどこれは命から湧いてくるっていうよりは、理性的に作り出されるような、理性的感情として対立や憎しみって出てくるのであって、命そのものから、命の根源から湧いてくる欲求っていうのは、「できることならなんとかみんなと仲良くしていきたいな」というのが命の欲求、命の叫びということであります。

これは例外なく誰でもそういう気持ちを本心において根源的に持っていると言うことができるわけです。だから集団で戦っている場合にはなかなか表には出てきませんけど、集団で戦っている人、戦争をしている人でも、本人に聞いたら誰でもみんなから好きになってもらいたいし、誰でも対立や戦争なんてやめにしたいという、そういう気持ちを個々人にみんな持っているんですよ。だけど集団になってくると、国家的な利害という、そういうものが出てきて、自分に対して損をさせるようなことは認められんということで、どうしても相手に対して対立的な敵対心を持ってしまうっていうことから、国を守るために戦争することになってくるわけですよね。

だけどやっぱりできることなら、そういう対立はないような、そういう状態で生きていたいってことを皆望むわけですね。何で一体人間の命の根源から湧いてくる欲求は、「できることならなんとかみんなと仲良くしていきたいな」ってそういう要求なのかとその理由を探っていきますと、我々自身、我々の命っていうのは、宇宙の摂理の力によって作り出された命を我々は与えられて人間として生きているわけですよね。この命は自分で作ったものじゃなくって、宇宙の力によって作られた命を我々は与えられて生きているっていう…そういう状態であります。もちろん人間っていうのは、地球において生まれた命が進化して人間に至ったんですが、その命の根源はやっぱり宇宙の力によって作られたものという、そういうこの事実があるわけであります。

命を作った宇宙というのは母なる命と言うことができる存在であって、母なら宇宙によって作られた命というのが、地球上で生きている命、我々の命と言うことができるわけなんですよね。お母さんだったら自分の産んだ子どもたちが憎しみあったり、対立しあったり、戦争したり、殺し合っているんじゃなくってお母さんだったら自分の産んだ子どもはみんな仲良くやってもらいたいなと思うはず、願うはずなんですよね。そういうこの、命を産んだ母なる宇宙の産んだ命に対する願いや祈りというものは、あるいは思いというのは、我々の命の中にあって、命を作った母なる宇宙の願いや祈りや思いというものが命から湧いてきて、我々はできることなら「できることならなんとかみんなと仲良くしていきたいな」と思うということになるという構造で我々の命は成り立っています。

人間として正しく生きていこうと思ったら、本当に人間らしい生き方をしようと思ったら、まずは自分の命に込められた母なる宇宙の思いを生きる、母なる宇宙の願いや祈りを実現する…そういう生き方をしようっていうのが、一番人間的な生き方の根源、根底にある重要な課題なんですよ。

どうしたらみんなと仲良くしてやっていけるんだろう、どうしたら戦争をせずにやっていけるんだろう、どうしたら対立を乗り越えてやっていけるんだろうってことを真剣に考えるってことが、お母さんの期待に応えて人間らしく生きるという基本的な姿勢であります。先日はオバマ大統領が広島に来られて、核なき世界の実現ということを言われた訳なんですけど、だけど核兵器がなくなっても戦争なくなりません。ただ本当に、本当にオバマ大統領に言ってもらいたいことは核なき世界ではない。本当にオバマ大統領に言ってもらいたいことは、戦争なき世界を作ろうじゃないかという、そういう提案を世界の指導者にしてもらいたいっていうのが、私の本当の気持ちであります。

戦争というものをなくす努力を世界の指導者が本当に真剣にやりはじめたならば、「こうしてみようか、ああしてみようか」とそういう提案が出てきて、だんだんだんだん戦争を乗り越えていき、対立を乗り越えていく世界が作られていくんじゃないかと思うんですけど。まだまだ世界は戦争をなくそうとしておりません。核兵器の廃絶ということばかり叫んでいて、核兵器がなくなったらもう安心して生きていけるのかってそういう感じの提案がなされておるばかりであります。これでやっぱりなかなか人間関係っていうことを考えても、悪くなってしまった人間関係を良い人間関係に修復していくというのは、そういう力を持つことはできないんじゃないかという風に思います。

とにかく、なぜ人間はできることならみんなと仲良くしたいという、そういう気持ちを現実的に持っているのか、それは自分の命は母なる宇宙によって作られた命というものを我々は預かって生きている。母なれば、自分が産んだ子どもたちはみんな仲良くし信じあって生きていってくれることを願ってるはずだ。であるがゆえに人間という命からは、できることならみんなと仲良く信じあって生きていきたいという気持ちが湧いてくる…これは命を作った母なる宇宙の願いを生きる、祈りを生きる、母なる宇宙のお母さんの思いに応えて生きるという、そういう生き方をすることが人間として正しい人間的な生き方なんだってことの証、証明であります。

そういうこともあって、我々は悪化した人間関係もそのままほっておくんじゃなくって、どうしたらそれを元の良い人間関係に戻していくことができるんだろうってことを考えるってことをしていかなきゃなりません。こういう考え方っていうのは、人間というのは目覚めたる命であり、人間とは目覚めたる宇宙である。という、そういう言い方をします。人間以外の動植物は、みんなと仲良く信じあって生きていきたいという、そういう気持ちを持ってないんですけど。人間は理性という能力を持つような段階の命になって、人間という、命の段階になって初めて、宇宙は自己自身に目覚めたんだ。あるいは命というものは人間という命に立って初めて命というものはなんなのか？ということを考えたり、自覚したりするという、そういう段階に命は到達したんだって言われて、人間とは目覚めたる宇宙である、人間とは目覚めたる命あるというそういう言い方をします。目覚めたる宇宙として人間が生きるとはどういうことなのかと言ったら、我々の命の中に命を作ったのは宇宙のどういう意思が、どういう思いが、我々の命に込められているのか、そのことを知って生きるというのが、目覚めたる命を生きるという、そういうことになってくるわけであります。

そういうことで、本当に人間が人間らしく、人間として正しく生きる根本の課題はなんなのかって言ったら、どうしたらみんなと仲良く信じあって生きていけるんだろう…このことを常に考えながら、こうしてみようか、ああしてみようかっていう努力…それが命を作って、命を与えてくれたお母さんの思いに応える人間として正しい本当の後の生き方なんだと言うことができる。そういう意味において、我々は対立や憎しみを乗り越えて、戦争を乗り越えて、みんな仲良く生きて行く道っていうのを考えていくことが人生最大の課題だと言うことが出来るってことであります。

人間とは目覚めたる宇宙だ、人間とは目覚めたる命だという風に言われるようになったのは20世紀の後半なんですよね。人間としての正しい生き方というものが、宇宙との関係性から考えられるようになってきた。宇宙というものを意識しながら人間が人生を生きるというそういう時代になってきたのは20世紀の中頃が済んでからであります。それまではあんまり宇宙との関係性というものを意識しながら人間が自分の人生を生きるっていう、そういう生き方はあまりありませんでした。我々が母なる宇宙の期待に応えて、そして人間らしく生きようとするってことは、これはこれからの時代を生きる新しい人間としての生き方なんだっていう風に言わなければなり ません。だけどやっぱり、レジメの2番目に書いてあるように人間関係に悩み苦しいでいる人が多いというのも、また偽らざる現実であって、本当に全世界的に言って離婚の激増は止まらないし、幼児への虐待はなくならないし、また高齢者への虐待もなくならないし、会社でも隣近所でも色々他人のことを責めたり、いじめや嫌がらせということがあったり、他人の悪口を言ったりっていうことは本当に日常茶飯時で、そういう人間関係はうまくいかない…もうそういう状態で苦しんでいる人が多い。家庭においても会社においてもみんなそういう人間関係上の悩みを持っているってのが偽らざる現実であります。

そこで人間関係がなんで壊れてしまうのか、人間関係の問題が生じてくるってことになるのか、その原因ということについても我々は考えてみる必要があります。もちろん自分自身が相手に対して悪いことをしてしまった場合には、やはり相手に謝らなきゃならないし、また自分のしたことに対する償いもしなければなりません。また相手が悪かった場合には、やはりある程度相手に反省を求めて、相手に謝罪を求めることもしなければなりません。自分が悪いことした場合には自分の罪を浴びてその償いをするとか、また相手が悪い場合は相手に謝罪を求めて、償いをしてもらうとかは、法律上の問題であります。

だけども、我々が日常苦しむ人間関係の問題っていうのは、夫婦の問題でも親子の問題でも、法律的な問題というよりは道徳的な問題というか、なんか相手が気に食わんとか、考え方が違うとか、価値観が違うとか、なんか気性が合わないとか、あの人はいや、あの人とは付き合いたくない、そういう形で人間関係が壊れてしまうということも日常たびたびある。もっと日常的な人間関係の問題から色々悩みが出てくるってことの方がむしろ一般の人間においては多いんじゃないかと思うんですね。

そういう人間関係が壊れていくというそういう状態を哲学的な言葉で言うと、人倫の崩壊といい、人間関係が至る所でズタズタに切り裂かれていくっていうことを人倫の崩壊と言うんですね。人間の人という字と倫は倫理法人会とかそういう言葉に使われます。犯罪を犯すとか、そういうことは法律で裁かれるんですけど、犯罪という法律にふれるということではなく、道徳的な人間の生き方の問題で色々と対立して苦しむ…考え方が違う、価値観が違う、気性が合わないとか、または相手のことが気に入らんとか、そういう感じで人間関係がうまくいかないという、そういうことで日常を我々はいろんな苦しみにぶつかるわけであります。

そういうことを考えると、そういう意味での道徳的な人間の生き方の問題で人間関係に悩みが出てくるということを考えると、どういう原因があるのか、ということなんですね。これは大きく分けて三つの直接的な原因があります。

一つは愛の欠如という問題があります。理性的に相手を責める、理性的に相手を叱るとか理性的に相手に注意するとか、そういうことで相手の立場とか相手の気持ちを思いやってあげるという風な心遣いっていうのはあんまりしないで、とにかく相手のやったことの問題点を直接的に責めるっていう、そういうをしてしまって、なんで相手がそういうことをしてしまったことになったのか、その理由、相手の気持ちを察してあげて考えてあげる、思いやりや心遣いを全くしない。それで、ただただ理性的に相手を非難する相手を責める相手に注意するということをしていると、相手は全然自分の置かれている環境や自分の立場、自分の気持ちを相手が考えてくれないで一方的に責めてくるということで、むかつくような気持ちになってしまって人間関係が壊れる…。これもよく組織にもある問題ですし、家庭でもやっぱりついつい相手を責めるってことをしてしまって、相手に対する思いやり心遣いをまず示すということが忘れられてしまってる。そういう場合に往々にして人間関係に憎しみや恨みが生じてくることがあります。これは非常に恐ろしいことなんですよね。だからもちろん問題があれば、注意をしたり叱ったり責めたりってことも現実的には必要なんですけども、ただ理性的にそういうことをするだけじゃなくって、やはり人間の本質は心ですので、相手の心を思いやるとか、心遣いをするとかっていうそういうことも同時にやることを忘れないと、ついつい人間関係の中にそういう恨みが出てきたり、憎しみが生じてきたり、対立が生まれてきたりということになってしまいやすい。これは人間関係が壊れる第一番目の原因で、愛の欠如と言うことができる原因であります。

ふたつ目の原因というのは、身勝手な愛。愛してる、愛してるって言ってるんだけど、だけども相手からすると全然愛してるとは思えないという、そういうことであります。これは親子の関係から言うと、お父さんお母さんはみんな子どもの為を考えて子どもを愛してるっておっしゃって、子どもに愛を持って接してるっていうことになってるんだけど、子どもから言うとお父さんお母さんはわかっていないと、反発をする…これは愛しているんだけど、子どもが本当に満足するような愛し方ができていなくて、親の立場から勝手に考えた愛を子どもに与えてるっていうそういう愛で、身勝手な愛、自己中心的にな愛、愛してるつもりの愛、そういう愛なんですよね。愛してる、愛してないわけじゃないんだけど、愛してるんだけどその愛がすれ違ってる、噛み合っていない。であるがゆえに愛はあっても相手が愛を感じてくれてないっていう、そういう状態がよくあります。

会社なんかでも幹部は部下のこと考えてやってるっておっしゃるけども、部下から言うと上司は全然俺のことなんかわかっていないと、不満を言う…そういうことも組織上、よくあります。幹部から言うと、部下は全然を俺の辛さが分かってくれていないってまた上司も部下に不平不満を言うと、そのお互いに何かしら相手のこと全然考えてないわけじゃないんだけど、その気持ちが相手に伝わっていない、通じていない…そういう自分の方からしたら愛してるつもりの愛、身勝手な愛、自己中心的な愛で終わってしまっている。これは恋愛においても、男女の間の心の通い合いに隙間風が吹くという、そういうなんかしっくりこないというそういう恋愛の仕方をしてしまってる人多いんですけど、それも愛してるつもり愛、身勝手な愛というね。そういう状態で恋愛も壊れてしまう。夫婦の関係においても、親子の関係でもありますし、会社の組織においても愛してるつもりの愛というそういうものが、人間関係が壊れる原因として考えられるわけであります。これも現実に多いんですよね。

最後のみっつ目の人間関係が壊れていく問題は、愛の未熟さ。愛はあって愛してるんだけど、その愛があまりにも子どもっぽい、未熟だ。相手に本当の満足を与えることはできないという。未熟の愛ってどういうことなのかと言ったら、愛は基本的に求める愛から与える愛へと成長するという、成長の仕方をするんですね。子どもっていうのは愛されたい一方で、愛されたいって気持ちの方が強いんですけど、だんだん、だんだん成長していくに従って、人間関係や社会を体験していって、人のために何かしてあげて相手が喜んでくれたら自分も嬉しいという気持ちで相手のために何かしてあげたい、相手に尽くすということに喜びを感じる愛がだんだん育ってきます。お父さんお母さんの場合は、子どものために自己犠牲的な努力を色々しながら、愛を与え尽くして全く見返りを求めないという無償の愛と言われる、そういう愛に人間の愛は成長していくというプロセスを辿っていくことになるわけであります。

求める愛から与える愛へ。求める愛が強いと、愛されていてもまだまだ愛され足りない、そういう気持ちがあって、愛されているのに相手の愛し方が気に入らんといって相手を責めてしまう。実際問題、一生愛されたいって気持ちの方が強くって、人を愛するっていうことの喜びよりも愛されたいっていう欲求の方が強くって、一生愛されたいって気持ちを持ったまま死んでしまうような人もおります。だけども、普通はだんだんと、愛されたいって気持ちもあるんだけど、だんだんと人を愛することの喜び、人の役に立つ喜び、そういう風なものがだんだんだんだんと育ってきて、そして人のために尽くすことを喜びとする…そういう風な、愛することの喜び、与える愛の喜びがだんだんと成熟していくことになるわけなんですよね。だけど成熟した与える愛の喜びがあったとしても、人間には死ぬまで愛されたい気持ちはなくなりませんけどね。どちらの割合の方が多いかによってその人の愛の熟成度が決まるってことなんです。愛されたいって気持ちが多いと幼い幼稚な愛、愛することの喜び、与えることの喜び、人の役に立つことの喜びっていうのを感じ始めることによって大人の愛、熟成した愛という、そういう形にだんだんと成長していくことであります。

だけども、人間関係が壊れるっていうのは、なかなか人のために尽くすことに喜びを感じるというよりも、愛されたいって気持ちの方が強くて、常に人に自分への愛を求めるというそういう気持ちが強すぎると愛されているのに物足りなくて、人を責めるときはそういうことをしてしまって、愛を自らが壊してしまう…そういうことがよくあります。とにかく人間関係が壊れる直接的な原因として一応考えられる。

もっと深い人間関係が壊れる原因を考えると、我々は今、民主主義社会という社会に住んでいますが、民主主義社会というのは基本的に権利を主張するという意識が強い社会が民主主義社会であります。ついつい権利を主張して、人を責めるっていうことをしてしまいやすいのが民主社会の現実である。民主主義社会というのは、ご承知のように権利を主張するという基本的人権ってものがみんなにあって、自分の権利を守るために、自分の権利が侵害されないように、自分を守るために、権利を主張するということが民主主義社会の社会を生きる原理としてあります。お互いに権利を主張しあって、バランスの取れたところで色々約束事を決めたり、法律を作ったり、規則を作ったりなんかして、社会は動く…それが契約者会と言われる社会の作り方なんですけども。皆が自分の権利を主張して、お互いに責め合う…そういう構造から、民主主義社会というのは人間関係は壊れやすいんですよね。もちろん社会には義務というものがありますが、民主主義社会の人間はあまり義務を果たそうとしない。何故かって言うと、基本的人権っていうのは義務を果たさなくても生まれながらに権利はあるんだっていうのが基本的人権思想の基本的な考え方ですので、義務を果たさなくても権利はあるもんですから、だから義務を果たそうとするよりは権利を主張する、権利を守ろうとする気持ちの方が強い。ついつい人を責めるという、そういうことをしてしまいやすい民主主義社会の実態であります。

言ってみれば民主主義社会っていうのは、お互いに責め合う社会という、そういう構造を持っているわけです。民主主義社会の政治は与党野党が責め合う、与党野党が責め合わないと政治は動かないというシステムになってますし、裁判も検事と弁護士が激しく責め合うということをしないと裁判は動きません。また経済界も労使が責め合う、労働者側と指導者側が責め合わないと動いていかないっていう、だんだんと良くなっていかないという、そういうことで民主主義障害の社会の動きは成り立っている。民主主義社会は責め合う社会だ。常に人を責め合う、そういう気持ちになりやすいんですね。なんか事件が起こると、自分の責任は棚に上げて人を責めることをしてしまいやすい。自分の子どもが池に落ちて死んでしまうと、そのお父さんお母さんは「何で市役所がちゃんと防御策をはっておかなかったのか、ちゃんとしてないから子どもは池に近づいて死んでしまったんじゃないか」と市役所を責めて、市役所に訴えを出して、賠償金を要求する…みたいなことをする。人を責めることによって賠償金、いくらかのお金を取ろうとする裁判があまりにも多い。日本もそうですが、アメリカなんかはもっと多い。アメリカは訴訟の世界って言われて、あまりにも訴訟が多い。人を責めてお金を取ろうという、そういう精神、裁判が非常に多い。さばききれないほどの裁判所には訴状、人を責める訴えがたまっていて、裁判がさばききれないし、裁判が進まない。これが民主主義社会の実態になっておるわけであります。ついつい人を責めるというそういう気持ちになりやすいっていうところが、民主主義社会にはあって、それが人間関係を壊す原因になってしまってるってことも我々は自覚していないといけません。

だいたい人間は不完全ですからいろんな失敗をするんですけど、失敗やダメなところをお互いが責め合っていたら、本当に社会は住むに堪えない地獄と化する…本当に不完全な人間が安心して生きていける社会を作っていこうと思ったら、理性的にお互いに責め合うんじゃなくって、愛を持って許しあって生きるという社会を作ってかないと、不完全な人間が安心して生きていくことができるような社会はできない、と言うことができます。そういう意味では社会とは、責め合う社会から許しあって生きる社会へとこれからどんどん成長していく、そういう方向性にあるんだと言うことができるわけなんです。だけど現実的にやっぱり色々問題があって注意したり叱ったり、批判したりもしなきゃならないんですけど、それだけで終わるんじゃなくてみんな短所があって欠点があるんだから、そういうものに対する配慮もちゃんとして、許してあげるって気持ちも半分は持っていて、そして相手との人間関係があまりひどくならないように注意して生きるっていうこともやっぱり考えていかないと、自分自身が社会においてつまずく、自分自身が自分に不幸を呼び寄せるみたいなことになってしまって、人間関係に苦しむ人間になってしまうことになるわけであります。ということも考えておかなきゃならない。あまりにも人を責めすぎてはならない。人を責めるっていう姿ほど醜いものはない。それに対して許してあげるっていう気持ちほど美しく温かいものはない。ということもよく考えてみる必要があるわけであります。

現実的には考え方が違う、価値観が違うこともあって、対立してしまうんですけど。同じ感覚、同じ考え方の人としか一緒にやっていけないという、そういう人が案外と多いのです。また、同じ価値観じゃないと一緒に仕事ができないという音はする人もたくさんいます。だけども、相手が自分と同じ考え方を持ってくれないと一緒にやっていけないっていう人は、自分しか認められない、自分しか許せない、自分しか愛せない人間だ。自分しか愛せないような偽物の愛。自分しか愛せないような愛でどうして子孫が残せようか。

愛は本来、種族保存の欲求から出てきたものであって、男が女を愛し、女が男を愛す。自分と違ったものを愛するところに本来の愛というものの原点があるわけであります。だけど今の人間はみんな理性の奴隷となって理性的にしか生きられないっていうことになってしまって、結果として自分と同じ考え方の人と付き合っていけない、宗教は違ったら殺し合うっていうのは今の世界の現状であります。これは明らかに全人類は今理性の奴隷となってしまって、理性的にしか愛せない、同じ考え方の人としか一緒にやっていけない、同じ価値観の人としか一緒に仕事ができない、同じ宗教にするしか一緒に生活できない、そういう状態になってしまっている。これは明らかに間違った愛のあり方であります。相手が自分と同じ価値観を持ってくれないと一緒に仕事ができない、これは自分しか認められない、自分しか許さない、自分しか愛せないというそういう愛なんですよね。これは明らかに間違った愛。ほとんどの人が今そうなっている。であるがゆえに、どれだけ好き好き好きで結婚しても、お互いに結婚するまでの生育過程や環境が違いますから一緒に生活が始まった途端に、いろんな違いが見えてくる…その違いが見えてくることによって、一緒にやっていけないっていう気持ちになってしまうっていうのがあって離婚の原因であります。そのためには考え方が違っても価値観が違っても、一緒に生きていける・一緒に生活していけるという力を作っていかないと人間は幸せになることはありません。

だけど現実的には考え方の違いで責め合う…価値観が違ったら一緒に仕事ができない、感じ方が違ったら一緒に生活ができない、そういうことになって人間関係は壊れてしまうということにもなるわけですね。よく考えてみてもらいたいのは、とにかく相手が自分と同じ考え方、同じ価値観を持ってくれないと一緒にやっていけないっていう人は自分しか愛せない人間だ。自分とは違うものを愛せないんだ。自分しか愛せない人間だ。自分しか愛せないような愛は偽物の愛。自分しか愛せないような愛でどうして子孫が残せようか。この考え方をちょっともう一度自分で取り入れて、自分の愛の在り方っていうのは、間違ってないかどうかってことを考えてみてもらいたいと思います。

人間関係が壊れてしまう、人間関係が崩壊する原因っていうのは、もっと色々考えることはできるんですけど、一応は大まかに言って今申し上げたことが人間関係壊れる直接的な原因という風に言うことができます。そういう人間関係の崩壊という問題を我々これからどういう風に乗り越えていけば良いのか、どうしたら悪くなってしまった人間関係を良い人間関係にしていくってことができるのかっていうことを考えることが、人生を幸せに生きるためには大事な課題になってきます。残念ながらまだ愛っていうのは、自然発生的な感情、情緒、本能、情熱という次元でしか考えられていなくて、愛は能力であると考えられたことがないんですね。あるいはまだ自然発生的な情緒・感情として取り扱われております。誰も愛は理性と同じように能力なんだ。愛は理性と同じように問題を解決することはできる能力なんだと愛を考えている人がいない。だけど愛ってものをただ感情や情緒や本能と考えていたら、愛は成長することはありません。愛を成長させようと思ったら愛を能力と考えて、小学校から大学、大学院のように学年が進むに従って愛の能力が成長していく…そういう教育の仕方、そういう愛の在り方を作ってことによって、我々はだんだん大人になっていくことによって、愛の力、愛の実力を持っていろんな問題を解決していけるっていう力を持った人間になれるわけなんですよね。だけど残念ながら今まだ愛ってのは能力と考えられていない。感情と考えられている。愛は成長しないんですね。ですから古代人が愛について悩んでいたように、同じ問題で現代人も愛について悩んでおりまして、愛には歴史が無い、愛には成長発展の歴史がない。全く古代から現実に至るまで愛は成長していない。古代の文学にも男女のいろんな問題が書かれていた。日本では源氏物語という平安時代に書かれた源氏物語の愛の文学が有名ですけど、そこには男女間の様々な、微妙な心情が書かれていて、その男と女の関係にはどういう問題があり、どういう風な悩み、思いがあるのかが書かれている。だけども書かれている男女の恋愛の悩みが決して現実なくなったんじゃなくって、現在もやっぱり恋愛でいろいろな悩みを持って、源氏物語中に書かれているのと同じようなことで、男女は愛に悩んでいるのが現実の問題であります。また夫婦の夫婦喧嘩のことも親子喧嘩のことも書いてあるんですけど、それと同じ問題また現在人も夫婦喧嘩し親子の問題で悩んでいる。愛にはまったく歴史がない。なんでそうなってしまったのかっていうと、愛は理屈を超えたものであって、愛は理屈抜きのものだと考えられてるものですから、愛は理性で考えるものでなく、愛は学問の対象にはならない、学問的に研究できない。愛は理屈を超えたものだから、学問的な研究の対象にならない…もっぱら文学のテーマであると。文学の中ではもう本当に色んな愛のバリエーションが描き尽くされていて、もうこれ以上何も言うことはないだろうと思うぐらいの文学の中ではいろんな愛が語られています。こんな愛もある、あんな愛もある、いろんな男女関係、親子関係、夫婦関係があると、文学の中で書かれると、書かれれば書かれるほど、愛のバリエーションが分かれば分かるほど、ますます我々は愛に悩む…人間関係に悩むという流れになってしまって、人類は苦しんでいるわけであります。

そういう状態から抜け出そうと思ったら、愛を単に自然発生的な情緒や感情として放置するのではなく、愛を能力と考えて、そして愛を文化として成長させて、愛を人生を生きる力に変えていくという努力をこれからしていく必要があるってことなんですね。愛の能力というものを考えて、愛の能力を成長させていくことによって我々は愛の悩み・苦しみから脱却できる…そういう道が拓かれていくということですね。

どうすれば一体我々は愛を能力として成長させて、様々な人間関係の問題を自分の力で解決して乗り越えていくという力を持つことができるのか、どうすれば我々は小学校から大学、大人になるという年齢が積み重ねることによって、どうしたら愛を成長させられるか。そのことを考えていかなきゃならない。そのためには愛を能力と考えて、愛の能力を成長させるってことをこれから考えていかなければ、人間関係の問題を処理して、自分が幸せになり相手を幸せにしてあげるという力を我々は持つことができません。

これは組織においても、人間関係というものを持ちながら組織は動いてますので、組織を本当に潤滑にあるいは能率よく、無駄なく動かしていく、またみんながみんな仲良く仕事をしていく状態に持っていこうと思ったら、愛の能力を成長させて、どんな問題が起こっても問題を恐れない、それをみんなが力を合わせて乗り越えていく…そういう組織を、愛の実力を持った組織を作っていけば、どんな人間関係の問題が起こっても、人間関係が壊れ、組織が崩壊することなく、逆に問題が起こることで皆が団結して、協力して組織が成長していくことになっていく…そういう可能性があります。愛を能力と考えて愛の能力を成長させることをこれからは考えていかなければならないってことですね。

では具体的に愛を能力として成長させるにはどうしたらいいのか。愛は人間関係の力で、愛の目的は素晴らしい人間関係をたくさん作るっていうことが愛の目的なんですよね。また今自分の持っている人間関係を今よりもっと素晴らしいものにしていく…それが愛の力であります。今自分の持っている人間関係を今よりもっと素晴らしいものして、またいろんな人間関係において、もっと素晴らしい人間関係を作っていく、素晴らしい人間関係をたくさん作っていく能力を持つ、これが愛の努力と言うことができるんですね。

そこで愛というのは人間関係の力ですから、まず考えなきゃならんことは、レジメの第5番目に書いてあることですけど、どんな人でも好きになる実力、とはいったいどうしたらいいのか。みんな誰も嫌われたくない、そういう気持ちを持っておるわけです。どうしたらみんなと仲良くやっていけるのか。そのためにはまず自分自身がどんな人でも好きになれるという力を作る努力をすることが、まず愛の努力の基本であります。しかし、皆不完全、人間は不完全なのだから、どんな人でも好きになるというのは不可能なんですよね。だけども、やっぱり自分は幸せになっていこうと思ったら、できるだけ、よりたくさんの人を好きになれる自分を作っていくって努力だけはしなきゃならない。自分の周りに嫌いな人が増えてくれば自分は不幸になる。自分が幸せになると思ったら、どうしても自分の周りに自分が好きだと思える人を増やしていくってことが大事な努力なんですよね。また実際問題仕事をするってことは、人間関係を素晴らしくしていかないと仕事を発展し、会社も発展しません。嫌な人が増えてきたり、対立が多くなってきたら仕事もだんだんと伸びていかなくなるし、うまくいかなくなって、失敗もします。だから具体的に仕事で成功したい、金を儲けたいと思ったら、素晴らしい人間関係をたくさん作って、力を作っていくことが大事であります。営業マンもなら、どんなお客さんともお付き合いができて、お互いに尊敬し合える関係になっていって、同じ仕事を頼むならあの人にやってもらいたい、とお客さんに言ってもらえるような人間に自分自身を成長させていかなければならない。それが営業能力の成長という中の大事な部分であります。人間関係作りが上手だっていうことは営業マンにとって非常に大事な課題であります。

または会社の中で仕事をする場合でも、あまり対立を呼び起こしてしまうような人間じゃなくって、どんな部下ともどんな上司ともちゃんと人間環境を作って、上手にやっていいける愛の実力を作る努力をする必要があります。できるだけたくさんの人を好きになることが出来る、その力を作るってことは人生において避けることのできない大事な課題だという風に言わなければなりません。特に悪くなってしまった人間関係を良い人間関係に修復して戻していくことを考えた場合には、より強力な人間を好きになるっていう力が求められてくることになります。

そこでどんな人でも好きになるって力を作って行こうと思ったらどういうことをしたらよいのか、第1番目は長所を発見し、短所と付き合うという付き合い方を覚えなければならないということなんですね。これは人間というのはどんな人でも長所もあるけど短所もある。人の短所を見始めたらもう好きになれん。しかし、どんな人でもいいところもあるんだから、いいところを探し出して相手のいいところと付き合わせてもらうという付き合い方を覚えるっていうことが、素晴らしい人間関係を築くために大事な課題だってことなんですよね。だけどその人の中には、あんなやつに長所なんかあるかって言いたくなるような人もおったりなんかしちゃったりなんかして、なかなかそう簡単にはみんなとうまくいくということは難しいこともあるわけなんですけど。

基本的には、どんな人間でも長所半分・短所半分という構造で人間性は成り立っておりますので、その人の短所ばかり見えてきて、人の長所があまり見えないっていう人は、それは残念ながら人の長所は見えないっていう人に問題があるのであって、人の長所が見えないってことは、人間性が狭いんですね。人間性の豊かさがない、人間性の幅がない。人間性が未熟だと。そういう問題点が自分にあるということを考えてないかないといけない。相手も短所ばかり見えてしまうのは、相手の責任ではなく自分の責任であって、自分の人間性を豊かにし、自分の人間性の幅を作り、自分の人間性を成長させていったならば、必ずどんな人間でもいいところが半分あるんだから、いいところが見えてくるという…そういう成長ができるんだってことを我々は忘れてはならない。短所ばかり、長所ばかりという人間はいない。誰もが長所半分・短所半分という構造を理解しなければならない。

なぜ人間性は誰もが長所半分・短所半分という構造なのかと言うと、それは人間も大宇宙の存在だってことなんですね。宇宙は我々の外にあるのではなく、我々一人ひとりが大宇宙の一部、大宇宙を構成している存在であるんです。宇宙とは、基本的にはプラスとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、それぞれがエネルギーバランスを模索しながら、秩序を保っているのが宇宙の摂理と言われる働きであります。宇宙は一対という対構造で成り立っています。基本的にはプラスとマイナスのエネルギーが半分ずつあって、それぞれがエネルギーバランスを模索しながら、秩序を保っているのが宇宙の摂理。その摂理の力で万物をクリエイトする。だから宇宙の中に存在するのは、全部対、一対の構造で成り立っているんですよね。ですからプラスにマイナスがあるし、陰には陽がある。光には影がある。表には裏がある。真には偽、美には醜、善には悪、男には女、動物には植物、みんな一対という構造で全てのものは成り立っている。これが宇宙というものが持っている構造であります。

人間というものには長所も短所もあるって言うことは、宇宙の摂理によって作られた人間とするならば、長所も半分・短所も半分という構造で人間性は成り立っているんだと考えなければならない。これは人間は長所と短所を半分ずつ持っているんだってことの根拠なんですよね。そして長所短所も宇宙によって作られたものだから、無くならないんですよね。どんな人にでも長所もあるし短所もある。短所を見始めたら好きになれん…だからどんな人にもいいところは半分もあるんだから、その半分のいいところを見つけ出す努力をする。その人にいいところと付き合わせてもらうという付き合い方を努力してやっていくということが、嫌いな人でも好きになれるという、そういう力を作っていくための大事なやり方であります。

基本的に人間は誰でも短所も半分、短所とは他人から嫌われて、他人から非難されて、他人に迷惑をかける…そういうところを短所っていうところなんですけども。どんな人間でも短所は半分あるんですよ。だから人間と付き合う時には、どんな立派な人間でも長く付き合っておったら必ず自分から見て嫌だなと思っても、どうしても半分出てくる…。それを当然と思って、そうじゃなかったらおかしいという人間観を持ってないと人間関係は長続きしない。ついつい短所を責めてしまって人間関係壊してしまう人多いんですね。だけど、短所はなくならない。短所をなくそうとする努力、これは間違ってるわけですよね。短所はなくならない。だけど、どんな人にもいいところは半分もあるんだから、そのいいところと付き合う…そういう付き合い方を覚えていくってことをしないと人間関係は素晴らしくなりません。

世間的にはどんな立派な人って言われてる人でも、その家の奥さんに聞いたら「あんな人になってしまった。どこがそんなにいいの？」と。全然普通の人間になってしまう、と。長く一緒にいたら、必ずその人の持っている短所が出てきてしまう。世間で尊敬されているみたいな、そんないい事ばっかりの人はいないということなんですよね。誰と結婚しても誰と付き合う場合でも最終的には、長く付き合っていたら自分から見て嫌だなって思うところが必ず相手の中から半分は出てくるんだ、それでいいんだ。そうじゃなかったおかしい、という気持ちを持っていないと人間関係は長続きしないし、良い人間関係にするっていうことができません。短所はなくならないんだから、なくならない短所はもうほっとおいて、相手のいいところを見つけて、いいところと付き合うという、そういうことをしていかないと。会社の経営においても、誰でも短所はあるんだから、その人のいいところを掴み出して、その人のいいところを会社の発展のために使わせてもらう・使ってやろうっていう人使いの仕方をしないと会社は発展していかない。

短所が目立つ人というのは、まだその人のいいところが発見されていないから短所が目立つんです。どれだけ短所はあっても、その人の長所、いいところが伸びてくると、短所が人間の味に変わる、人間味に変わるんですね。長所を伸ばさなかったら短所は永久に単なる短所で他人から嫌われるんですね。だけど長所を伸ばして、長所が他人から一目置かれることになってくると、短所は何も努力せんでも、その人の人間味に変わる。あんなすごい力を持ってるやつでもこんなところもあって面白いよねと。このところもあって人間味を感じるよねって言われるようになってくるんですね。長所を伸ばさなかったら短所はみんな嫌がられるんだけど、長所を延ばしていくと短所でも魅力に変わる。長所伸ばしたら短所も魅力に変わるという構造があります。

これまでは人間の成長の目標は、円熟と言われてきたんですけど、まん丸の円は欠けているところがないとなると、人間は皆不完全であっちこっち角があって、でこぼこだらけっていうのが人間というものの個性の在り方であります。だから長所を伸ばして、短所はあるんだけど、それがまた魅力になってくる…こういう状態っていうのを角熟と言う。円熟ではなく、個性を持った人間の成長の目標は角熟。個性を持ったまんま、そのまんま東で熟していく、角ばったまんまでさんまのまんまで熟していくというのが、個性を持った人間の成長の目標である。角熟とは、長所を伸ばすことによって長所が他人から一目置かれるようになってくることによって、短所も人間の味に変わって、短所も人間の魅力になってくる。この状態を角熟。丸くはなるな、とんがって生きろというものが個性を磨いて生きる人間の成長の目標であります。とんがって生きることは、決して喧嘩して生きることではありません。個性を磨くことです。長所を磨いて人の役に立ったときに角熟と言えます。短所はご愛嬌。長所を伸ばすことによって長所が他人から一目置かれるようになってくることによって、短所も人間の味に変わる。逆に短所も人間味として、魅力のひとつになります。円熟ではなく、角熟を目指す。これは個性を磨くという生き方の最も成長した段階を角熟と言います。

誰でも長所も半分、短所も半分。人間と長く付き合っていこうと思ったら、嫌だなと思うところが半分は出てくる。これを覚悟していないと長続きしません。また友達関係も長続きしません。人の短所を嫌がるようでは人間を人間として愛する資格がない。長所しか愛せない、短所を愛せない人間は、人間を人間として愛する資格がない。その人を愛するということは、その人の長所も短所も愛するということ。短所を愛するとは、その人の短所も長所も愛する。さらに短所も認めて、許すこと。昔から愛するとは、許すこととも言われてきました。許すとは、短所も許せる。それが人を愛するということの証明である。短所を愛せない人間は、人間を人間として愛する資格がない。

本当にその人愛そうと思ったら、その人の長所も短所も認めて許して愛さなければ、その人は愛していない。これも恋愛をし、結婚をするためには心得てなきゃならない重要な問題であります。みんなこれまでは短所をなくさないかんと思って、自分の嫌なところは直してくれって相手を責めていた。だから人間関係が壊れるんだ。そういう壊れた人間関係を修正しておこうと思ったら、我々は短所の存在を仕方がないものとして認めて許して生きるという愛の力を作っていかなきゃならない。もちろん、長所も愛する。短所も認めて許してあげる。それが人間をまるごと愛するという愛し方であります。こういう力を作っていけば、愛は文化となり、芸術となる。恋は自然、愛は芸術。人生において愛の奇跡と言われるような美しい愛を実現しようと思ったら、どうしても長所も短所も愛するっていう愛し方を覚えなければならない。

長所も短所も愛するということは、その人をまるごと愛してるって事なんですよね。短所はなくならないんだ。なくらない短所をなくそうとして人を責めたら人間関係が壊れる。人間関係を修復し、良い人間関係を作る基本は相手のいいところと付き合う、相手の長所を見つけ出してあげる、相手の長所を伸ばしてあげて、相手の長所を使ってあげる、相手の長所を活かしてあげる…そういう関わり方をしていかないと、人を活かす“活人力”、人の存在を輝かせてあげるという活人力という愛はできません。

これもこれからの新しい時代を生きるために大事な人間観なんですよね。これまでは理性的に短所をなくしましょうという人間観で、短所はない方がいいという考えでやってきましたけど、それが人間を苦しめてきたんだ。これからは、短所は認めなければならない。なぜか？人間の本質は理性ではない、心だ。人間らしい心とは謙虚な心だ。謙虚な心を作ってくれるのは短所だ。短所がなくなってしまったら人間を謙虚にする理由がなくなってしまう。長所ばかりなら傲慢になってしまう。短所があるから、人間は謙虚に生きることができる。謙虚にすることができる。短所がなくなってしまったらもう絶対謙虚になれない。短所こそ人間らしい謙虚で優しい心を作ってくれる原理なんですね。だから短所をなくしてしまったら、人間ではなくなってしまうんです。短所をなくすことは人間でなくなってしまうことなんです。だからこそは我々は、短所をあまり気にしないで、相手のいいところを探して、相手のいいところと付き合う付き合い方を覚えていかなければなりません。

これはまた第5番目の「どんな人でも好きになる実力」のイで書いた長所を発見し、長所と付き合うということです。

2番目のロですか、物事はプラスにもマイナスにも解釈できると言われる両義性という原理なんですけどね。全ての物事は両義的であるという言葉があります。どんなものでもプラスにも解釈できるし、マイナスにも解釈できる。どんなことでもプラスにもマイナスにも解釈できるのだから、マイナスに解釈したら損である、ということなんです。だから、プラスに解釈する。マイナスに解釈したら嫌になるし、不幸になる。プラスに解釈したらいい方向性に動いていくし、物事をプラスに解釈したら幸せになれる。人生は解釈力で決まる。自分の身の回りに起こる出来事をどのように解釈するかによって人生決まるんだ。自分の身に降りかかる様々な問題を良かったと思ったら自分は幸せになれる。これは嫌なことやこれは不幸やと思ったら実際不幸になってしまうし、物事は悪い方向に動いてしまう。人間と付き合う場合でも「なんかあいつは臆病で弱い人間だな」と思って相手を見下すような目で見て、人間関係が悪くなってしまった場合に、その人間関係を修正しようと思ったら、臆病をマイナスに評価してるので、臆病をプラスに評価したらどうなるか。臆病をプラスに考えたら慎重と置き換えることができる。慎重な方ですねと言ってあげることで、相手の性格をプラスに評価していることになる。みんながあいつを臆病と言っている中で、自分が慎重な型なかたですねと言ってあげたら、あいつだけは俺のことをよく言ってくれて自分を評価してくれたと思って、こちらの方に良い心持ちで対応してくれることが期待できる。これを両義性と言います。心理学では人心操縦法に使う原理なんですよ。人の心を操ると言う、そういう方向性で両義性は心理学で使われています。

これは、昔から言われる「豚も褒めれば木に登る」と。褒めてあげると相手はそういう方向性に変わっていくという。相手にこういう人間になってもらいたい場合は、そういう褒め方をすれば良いということ。相手をけなしたらどんどん相手は嫌な人間になってしまう。褒めてあげると、褒め言葉で相手が成長してきて、より自分が褒めたくなるような人にさらに成長して変わっていってくれる。褒めて人を成長させるというやり方なんですね。

この両義性というのは、頑固で融通が利かない人がいたら、これもプラスに評価して、なかなか信念がありますよねと言ってあげる。

どうしようもなく暗い人がいる場合は、暗いとは言わずに、その人にはなかなか深みがありますと。みんなが暗くて嫌な人だと思っている中で、そんなことを言われたら喜んで、こちらの方にはその快く対応してくれるみたいな…そういう風に変わってくる。こちらが相手をどう解釈するか、どういう風に理解するかによって相手がこちらに対する態度を変えてきてくれる。相手が自分の言葉に応じて成長してきてくれる。言葉には人を成長させる力がある。言霊、言葉には人を動かす力があるんですね。言葉は人を成長させる力がある。逆にたった一言が人を絶望のどん底に陥れることもある。でも、たった一言が人に勇気を与えて、生きる力を呼び起こすってこともある。言葉の力っていうのは本当に大きなものがある。何気なく自分が発した言葉が相手を不幸に陥れる。相手の恨みを買うこともある。また、なんてことなく言った言葉が相手をものすごく喜ばしたり、ものすごく勇気づけたりっていうこともあったりなんかする。言葉の力っていうのは本当に人間関係で大事なんですね。どんなことでも、どのように表現するか、どんなことでもどういう風に相手に伝えるか、ちょっとした言葉のニュアンスの違いがものすごく大きな人間関係の違いを作り出すことがあります。

人生は解釈力で決まる。自分の身に降りかかる色んな出来事を良かったと思ったら自分は成長していって幸せになる。嫌なことやと思ったら不幸になって、どんどんと落ちぶれていく。

だけども、世の中には偶然はない。宇宙には偶然はない、全部必然だ。だから昔から言われる言葉ですけど、「万象是皆わが師なり」。万象とは全ての出来事、全ての現象のことで、全ての出来事は全部自分にとって先生であり、何かを教えてくれてるんだ。起こることに偶然はない。全部で何らかの理由がある。何の理由もなく何の意味も起こる出来事はないと。みんな必然的に起こることなんだ。だから、どんなことでも一体この現象は自分に何を気づかせようとしてこういう現象が起きているのか？ 自分に今起きてることは一体何に気づかせようとしているのか？ こういう現象は自分に降りかかってきてるのか、この出来事から俺は何を学んだらいいのか。このように解釈力を持って自分の身に起こる出来事を理解して、全てのものから何かを学んで自分を成長させていく。何かに気づいて自分が成長していくという生き方を心がけていけば、人生は幸せになっていく、人生は豊かなものになっていく。

またどんな出来事、どんな人間関係の問題でも、それをプラスに解釈すれば人間関係は良くなっていく。「アホ」って言われても「ありがとう」なんてことを言っておったら、人間関係は壊れない。どんなに非難されても、そう言われてみれば俺にもそういうところがあるよなと思って、これから注意しないといけないなと、思って「ありがとう。よく言ってくれました。これから気をつけます」と言ったら、こちらの事を嫌がって、嫌いで自分のことに対して責めてきた場合でも、こちらの方で「ありがとう。よく言ってくれました。勉強になりました。ありがとう」って言ったら、肩透かし食らっちゃったようなもんで、受け止め方によって人間関係が良くなって尊敬されちゃったりなんかしちゃったりなんかして。さらに良い人間関係ができることになってきてしまうかもしれませんね。どのように物事を解釈するかが大事であり、人生の課題であります。

それから5番目のハは、声をかける。これよく社会に出たら、挨拶をすることは大事だと言われますが、挨拶をするとは、心の橋を渡す行為。声をかけないと心の橋が渡らない、相手との間の心の絆が作れない。「おはよう」と言うことで、こちらから相手の命に心の橋が渡って、心が通じ合うってことになってくる。だから、おはよう、おはようと挨拶をお互い仲良くなってくるんだけど、挨拶しないと「なんや、あいつ」と、「変なやつや」となってしまう。挨拶をするとは心の橋を渡す行為。挨拶をしないと心の橋が渡れないから心が通じ合わない。心の絆ができない。どんなに人間関係が悪い場合でも、良い人間関係に戻したいと思ったら、こちらの方から積極的に相手に会ったら「おはようございます」とか何か挨拶をする。だけど人間関係が悪いと、こちらからおはようございますと言っても、良い反応が得られないかもしれませんが、それにもめげずに、「この人と仲良くしたいんだ」って思いが強ければ、毎日、毎日とにかく、会うたびにおはようございますと声をかける。相手が「こんなやつに挨拶を返すか」と思っていても、毎日、毎日続けることで、なんかしら返事をしないとおかしいかな、なんて思っちゃったりなんかしちゃったりして、あるときうっかり返しちゃったりなんかしちゃったりして、そこから突然なんか人間関係良くなったよなって、そういうことになっていく可能性があるんですね。

これもやっぱり人生を生きる非常に大事な原理で、何かやりはじめたら、途中でやめたらゼロ。途中でやめたら、その程度のヤツやった、その程度の思いやった、その程度の愛だったで終わってしまう。やりはじめたら結果が出るまでやめないっていうのが、成功する人間なんですよ。結果が出るまでやめない。良い人間関係が作れるまで諦めずにとことん声をかけ続けると、必ずどこかで相手からも声が返ってきて、そして良い人間関係になっていくという。どうしてもこの人とはこの状態で置いとけないと思った時には、諦めずに声をかけ続けるという努力が、道をひらくことになってくる。そんなことが人生に多いです。諦めて途中でやめたらそれまで。その程度のやつやった。その程度の思いだった。その程度の愛だったと終わってしまう。結果が出るまでやり続けることによって、そんなにまで持っておったのか、そんなに強い愛なのか、それを相手が感じてくれて、こちらに対する態度を変えてくれる。この声をかけるってことは、人間関係の修復に非常に大事な原理であります。こちらから積極的に声をかける。相手が返事をしてくれなくてもこちらから積極的に声をかけ続ける、これは人間関係修復の非常に大事な行動であります。そういうことも覚えておいてもらったら、何らかの人生の役に立つ時が来るんですよね。

それでは後半の話に入っていきたいと思います。悪化した人間関係を修復する実力の第2番目ですけど、レジメでは6と書いてあるところから。「誰からでも好かれる実力」ですね。第5番目は「どんな人でも好きになる実力」ですから、第6番目の誰からでも好かれる実力は、第5番目と対をなす、一対の原理なんですよね。誰からでも好かれるって言うこともやっぱりこれは不可能で、そんなことは絶対にないわけですけど、できるだけより多くの人から好きになってもらえるという、そういう自分をつくるって努力もやっぱり人間的な成長のためにどうしてもしなければならない、また人生の重要な課題であります。

一人でもより多くの人から好きになってもらえる自分を作るという、そういう努力をするってことも愛の努力なんですね。誰からでも好かれるってことは、また別の言葉で言うと人間的魅力、人間的魅力の形成と言うこともできるわけですね。どういう風な人間的魅力ってものを自分の個性として作っていくかも考えなければならない。人間的魅力っていうのはどういうことかって言うと、人間の持っている要素の中で人を感動させることができるものを魅力と言うんですね。魅力とは、人を感動させることができる要因である。プロならば、何らかの意味で「さすがプロですね」と言って人を感動させることができるような、そういう能力・技術、何かそういうものを持っていることがプロとして仕事をしていく上でも大事な課題であります。

何らかの人を感動させることができる要因、人を感動させることができる力っていうものを持つことが、プロとして仕事をしていく上での生命線。一番肝心なところだと言えます。

よく感動することが大事だっていうことをおっしゃる方も多いんですけど、感動するのは命の自然な働きなんですけど、人を感動させる力っていうのが初めて人間力という、努力して我々が作っていく力なんですね。感動するってことは命の自然の働きだけど、人を感動させる力こそ、人間が努力して作っていく人間力、本当の実力と言えます。プロであるならば、なんらかの意味でお客さんをあるいは仲間を感動させることができることが重要。「あいつはすごいやつやな」と言われる何かを持つことが、存在感を持ってプロの世界で生き抜いていく上で要求される力というのも考えておかないといけません。

何を持って人を感動させるか、人を感動させることができるものにならないと、仕事の上で価値ある存在になれない。もう今は何でも屋いらない。どういう個性を持って、会社において存在感を作っていくか。どういう個性で人の役に立つかが、非常に大事なテーマなんですよね。それで何を持って人を感動させるか、何を自分の個性ある特徴として成長させていくか、何を磨くかっていうことですね。やはりプロとして考えていかなければなりません。

人間の持っているものの中で人を感動させることができる要因とはなんなのかっていうことを考えていきますと、人間っていうのは理性・感性・肉体の三つの要素が絡み合って、その相乗効果で人間という命は出来上がっているわけですね。ですから、そういう命の構造から考えてみると、人間というものには理性的魅力と感性的魅力と肉体的魅力って三つの魅力に関わるフィールドがある、分野があると言うことができます。

そして理性的魅力にも三つの魅力があり、感性的魅力にも内容として三つの魅力があり、また肉体的魅力も内容としてみっつの魅力がある。みっつのフィールド、領域の中にそれぞれみっつ、感動の要因がある。3✕3が9。これをもって銀河鉄道999ですね。全で9つの感動の要因が人間にはある。この中のどれを俺の魅力にしようかってことを考えながら、自分の特徴作りってものを考えてみてもらいたいと思います。

理性的魅力とは？理性という領域の中で人を感動させることができる要因として三つの要因がある。第1番目は、並外れた知識量。なんでそんなことまで知っとるんや、すごいなーと言って人を感動させることできる。プロとして仕事をしていこうと思ったら、自分のやっている仕事に関する知識においては、人後に落ちない、さすがと言われる、そういう知識量・技術の水準ってものを目標にする必要がある。ようそこまで知っとるなと言って客を感動させて、同じものを頼むならあの人に頼むと言ってもらえる仕事上の特殊能力ってものを作っていくってことも、人を感動させるためには考えることができる大事な課題ですよね。並外れた知識量、今自分がやっている仕事において、もうここまで以上はない、もうここまで来たら世界最高レベルや、と言える知識量、技術の水準をプロとして自分が追求していって、そして今自分がやっている仕事の仕方、これ以上の仕事の仕方は今の世界にはない。今自分のやっている仕事の仕方が今の世界で最高水準や、そういうこの信念・自信を持ってお客さんに対応する。そういうことも、やっぱプロとして考えておかなきゃならない重要な課題であります。

やはり誇りを持って仕事をするためには、今自分のやっている仕事の仕方は今の世界で最高水準、これ以上の仕事の仕方はない、とそういう自信と誇りを持って仕事をするということが、プロとしての仕事の仕方において目標とされなければならない。その意味で、その中の一端として並外れた知識量が人を感動させるということも考えておいてもらいたい。

二つ目の理性的魅力は、知恵。なかなかあいつは知恵者やな、と言われるというものも人を感動させることはできる。みんながどうしたらいいかなって困ってる時に、誰かがこうしてみたらどうやって見えるという。そういうことをしてみたらどうやって言えるってそういうことを湧いてくるってことなんですよね。知恵とは、命から湧いてくる。そういう命から知恵が湧いてくるという人間になって、その知恵において人を感動させることができる人間になろうと思ったら、どうしたらいいのか。どうしたら知恵が湧いてくるという構造ができるのか。

知恵とか気付きが湧いてくるというのは、これは潜在能力が出てくるという、そういう形です。それによって、知恵、気づきが湧いてくるわけですけど、そういう人間になるためには、今自分の持っている力でできないことがあった場合、今自分の持っている力ではできませんと断るのではなく、今自分の持っている力でもなんとかできるようにしたいと思って頑張る、限界への挑戦。不可能を可能にする、そういう仕事に対する姿勢を持っていたら、必ず知恵者になれる。自分の持っている力で仕事している限り、知恵は湧いてこない。今自分の持っている力ではできないんだけど、何とか頑張っていると今自分の持っている力ではなんともならんということで、命に潜在する能力が湧いてくるっていう順番がくる。知恵者、気付き、知恵が湧いてくるという人間になる原理なんですね。

命から湧いてくるものを持つ人間になろうと思ったら、今自分の持っている力の限界への挑戦、不可能を可能にするという生き方、そういう気迫、意気込みを持った仕事の仕方、これが会社を発展させる原動力になるし、時代の要請に応えて自分が成長していくという仕事の仕方になってくる。知恵が湧いてくる人間になろうと思ったら、限界への挑戦、不可能を可能にするという生き方に魅力を感じる、そういう仕事の仕方をする必要があります。そういう力が湧いてくるという人間になれれば、必ず周りの人を感動させることはできる。

3番目の理性的魅力は、天分。素質ってことはよく言われますが、どんな人間に天分がある。どんな人間でも天から与えられた特別の才能をみんな持ってまれてきてるんだ。この時代に生まれてきてきたからには、この時代に生きて、こういう仕事をして生きて死んでいけよと。こういう能力を発揮して生きて死んでいけよと。その人のみの独特の才能ってものは、みんな天から与えられて母なる宇宙から命を与えられてみんな生まれてきてるんですね。どんな人にも天分がある。天分というのは天の仕事に一端を担えるような、そういう素晴らしい能力を天分と言います。どんな人にも天分がある。どんな人にも他人にはない独特の才能がある。それを証明するものとは、顔が違うということ。この顔が違うっていうことが、その人独特の才能があるってことを証明する現象なんですよ。なぜそのことが言えるか、顔の形っていうのは、顔の形を決めるのは遺伝であって、遺伝子が顔の形を決めてしまう。遺伝子とは何なのか、これは能力が物質化したものが遺伝子。能力が物質化した遺伝子によって顔の形が決まって、その顔の形は全人類がみんな違う。顔が違うということは、自分には自分にしかない独特の能力があるんだってことを顔が証明しているということになるんですよ。顔こそ最も素晴らしい個性の象徴。顔が違うということは、俺には他の人間にはない、独特の才能があるんだってことを表現している。顔とは何なのか、顔とは才能を表現。顔が違う限りは、他の人間ができない、自分にしかできないものをみんな持っている。これは全ての子ども達に限りない希望を与える重要な生物学原理です。俺には俺にしかできんことがある。俺は最高っていうことができるものを俺は持っているんだ。天分のツボにハマったら、俺は世界一になれる。顔は何も言わんでもこの世界にただひとつしかないんですよ。だからその自分の顔を生き抜けば、自分の顔を生きれば、必ず何らかの意味でオンリーワンかナンバーワンか、どちらかで世界一になれる可能性がある。これが顔という意味なんですね。顔こそまさに個性の象徴だ。特に顔っていうのは何を表現しているか、能力を表現している。自分には自分独特の能力があるんだ、ということを顔は表現してくれている。だからこの顔を生き抜けば、必ずこの時代において自分にしかできない仕事をして生きて死んでいくというそういう生き方ができる可能性がある。

では、どうすれば自分がこの世界一になることができる能力、仕事を発見できるのか。天分の発見方法というのがあるんですよ。この方法さえわかったら、自分の天分を発見してあげることができるし、部下の天分も発見できるし、子どもの天分も発見してあげることできるし、色んなことに役立てることができます。

天分の発見方法は5つあります。勿体ぶった話をすると期待されてしまいがちですが、言われてみるとなんだそんなことか、と言いたくなる話です。しかし、言われないとわからないものなんですよ。

天分の発見方法の第1番目は、やってみたら好きになるかどうか。

多くの方が、なんやそんなことかと、そんな当たり前かと思われたと思うんですけど。これがちょっとね、そう簡単に当たり前と言ってしまう内容じゃないんですよ。やってみたら好きになるかどうか、やってみて好きになったらやらないかん。才能があるから。やってみて好きにならんかったら才能ないからやめないかん。野球を見とって好きでも、才能には関係ないんですよ。野球やってみて好きになったら才能あるけど、野球やってみて好きにならんかったら才能はないという判断をセントバーナード、せんといかん。

何でかと言ったら、能力っていうのは物質、遺伝子なんだ。肉体なんだ。これまでは能力っていうのは精神的なもんだと言っておったんですよ。だから才能・天分を発見できなかったんですよ。だけど現在の生物学の研究によれば、才能・能力は遺伝子なんだ。遺伝子をして命に内在してるんだ。これは潜在能力。遺伝子が潜在能力。能力は物質であり、肉体なんですよ、物なんですよ。これまで考えてきてみたいに能力は精神じゃない、意識じゃないんだ。どれだけ意識で好きでも、才能に関係ない。肉体を動かして、やってみたら好きになったらやらないかん。肉体を動かしてやってみないと才能があるかどうかわからん。これがすごい発見なんですよ。やってみたら好きになるかどうか、好きになったらやらないかん。やってみて好きにならんかったら絶対やったらいかん。やってみて好きにならんことやったらもう辛い苦しいだけで人生終わってしまう。やってみて好きになったら誰がなんと言ってもやらないかん。

第2番目は、やってみたら興味・関心が湧いてくるかどうか。やってみて興味・関心が湧いてきたらやらないかん。

第3番目は、やってみたら得手やな、得意なことだと思うかどうか。得意ではないと思ったらもうやめとかないかん。

第4番目は、他人と一緒にやってみたら、いつも自分の方がよくできてしまうかどうか。一緒にやってみて自分が負けることがあって、何回か自分よりも素晴らしくできるやつがおったら、もうこれはやめておこうと。このことについて俺より凄い奴がおるんやからやめておこうと。他のことやろうと思わないと。誰とやってもいつも自分がかつ場合はやらないかん。

最後の5番目は、真剣に取り組んだら、問題意識が湧いてくるかどうか。真剣に取り組んでも何の問題意識も湧いてこない。言われていることをやっているだけでは、そこには自分の才能はないんですよ。才能がある場合は、人に言われたことをやっていると、ここのところはもっと良くなるはずだとか、問題意識が湧いてくる。問題意識が湧いてくる=自分が出てきている。そこには、君にしかできない、君独特のものがあるよと教えてくれているということ。

このように天分の発見方法は5つしかない。

やってみたら好きになるところ

やってみたら興味・関心が湧いてくるところ。

やってみたら得手やな、得意なことだと思うところ。

やってみたら他人よりも、いつも自分の方がよくできてしまうところ。

やってみたら真剣に取り組んだら、問題意識が湧いてくるところ。

この5つの所ジョージさんが天分の発見方法なんですよ。なぜ断定的なことが言えるのかと言ったら、現実の社会の中で成功した人は全部5つのどれかで成功しているから。これ以外にないんです。成功した人は、好きなことをやって成功したか。興味・関心あることで成功したか。得意なことで頑張ったか。人よりもよくできてしまうことで努力したか。問題意識に人生をかけたか、この5つしか成功パターンがないんですよ。この天分の発見方法は、現実の社会の中で証明された原理だから。この原理は現実の社会の中で実証を通して証明された原理だ、だからこれは確かだと言うことができる。とにかく、5つの天分の発見方法で、自分の天分、才能を探し求めていって、一番強烈なものが命から湧いてくるもの、それが天分のツボなんだ。天分のツボにハマったら、笑いが止まらない人生ですよ。左うちわどころではないですよ、両うちわで扇いでしまって、風邪をひくんじゃないのかと言うくらいですよ。それほど嬉しい、それほどの能力が湧いてきます。これが天分のツボにハマる人生、最高の人生ですよ。最高の自己実現。

能力というのは、どんな仕事でも活かせる。この仕事をしないとこの能力は活かせないというものではない。才能・能力はどんな仕事でも、その人の能力を発揮できるところがあるんですよね。まずはその自分の才能・天分がどこにあるかを探して求めて、そこに焦点を当てて集中的に努力をする…これが存在感のある、すごいなと言われる人間の道であります。天分のツボにハマる。

とにかく、並外れた知識量と知恵と天分。これが理性という領域で人を感動させることができる要素です。

次は感性的魅力。感性という感じる力。感性・感じるという領域で人を感動させることができるものをみっつある。その第一番目は、意思の力。不撓不屈の意志。どんなことでも結果が出るまでやめない。うまくいくまでやめない。成功するまでやめない。途中では絶対やめない、という意志の強さというものが人を感動させる。どんな問題が起きても、その問題を恐れずにその問題を乗り越えて、結果が出るまでやめない、途中で諦めない、それが意思の強い人間の生き方。不撓不屈の意思、それが人を感動させる。

では、そういう意思を持った、結果が出るまでやめないという意思の強い人間になろうと思ったらどうしたらいいのか。意思の強さの原理とはなんなのか？それは命から湧いてくる欲求の強さなんです。命から欲求が湧いてくると人間は行動し始める。湧いてこないと行動をやめる。意思の強さは、欲求の強さに比例する。意思の強い人間は欲求の強い人間だ、欲望の強い人間だ。欲望が湧いてこれば、やめられない止まらないかっぱえびせん状態で突っ走る。どうにも止まらない～という山本リンダ状態で突っ走る。

欲望が湧いてこなくなったらやめる。湧いてくる限り、やめられない、止まらない。これが意思の強い人間の意思の強い根拠です。命から湧いてくるものがあるかどうか。興味・関心・好奇心・欲求・欲望など、命から抑えがたきものが湧いてくるかどうか。意思の強い人間になろうと思ったら、欲望・欲求の強い人間にならないかん。しかし、今はそれほどの抑えがたき欲望・欲求を持った人は少ないんですよね。では、どうしたらなれるのか？ことがうまくいくまでやめない人間になれるのか？命から湧いてくるようになるか？どうしたら不撓不屈の意思を持った人間になれるのか？

その原理は何なのか言ったら、人間の本質は心だ。心とは意味と価値を感じる感性なんだ。だから、人間は意味を感じたらやる気になるんだ。価値や素晴らしさを感じたら命に火がつく、燃えるんだ。意味と価値を感じたら行動力・実践力が出てくる。本当に命が湧いてくるものを作ろうと思ったら、我々は今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさ、すごさに目覚めなきゃならん。今自分のやっていることは、こんなすごいことなんだと思ったらやる気になる。今自分のやっている仕事は、こんな素晴らしいことなんと感じたら命に火がつく、燃えてくる。今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさ、すごさを感じないかん。感じようと思ったら考えないかん。理性で今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさ、すごさを考えて、理性が分かったらそれを感じる感性が成長してきて、感性がすごさを感じたら突然行動力が出てきて、もうやめられない・とまらない状態になってしまうんですね。

意味を感じないと人間はやる気にならん。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない。だけども、現代人は残念ながら、理性的に知識や情報や事実に支配されてしまって意味や価値を感じるってことがあまりできてない。意味や価値を感じないからなかなか命に火がつかない。行動力が出てこない、やる気にならない。もちろん、仕事をするためには知識や情報も大事ですけど、それ以上に本当に命が燃えるって状態になろうと思ったら感じないかん。感じてこそ人生、燃えてこそ人生。感じないと燃えないんだ。感じたら燃えるんだ。特に人間的に素晴らしい仕事をしようと思ったら、意味や価値や値打ちや素晴らしさ・すごさを感じないかん。そういう感性を作るためには、そういう感性を作るために我々は理性を手段能力に使って、今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさ・すごさを考える。理性が考えれば、それを感じる感性が成長してきて、感性が感じたら命に火がつく…そうして我々は燃えて生きるという人生を作っていけるわけであります。

どんな仕事でも価値のない仕事はない。意味のない仕事ない。どんな仕事にもその仕事なりに他の仕事はない独特の素晴らしさがみんなある。それにいつ気が付くか。今自分のやっている仕事の本当の素晴らしさにいつ気が付くか。そのことによって、この仕事に命をかけようという、そういう思いが湧いてくるかどうか決まる。みんな燃えたいんですよ。本当に燃えようと思ったら、このためなら命もいらん、という思いにならないと本当に燃えられない。命とは生きたい、生きたいと思っているものですけど、生きたい、生きたいと思っている命が一番輝くとき、一番生かされるとき、それは生きたい、生きたいと思っている命が、このためなら俺は死んでもいいと思ったとき、この人のためなら死ねるぜ、このためなら死ねると思ったとき、命は最高に盛り上がるんですよ。死ねるという思いを持てるものと出会わないと、命は完全燃焼しない。本当に人に惚れたら、命は燃え上がりますよ。もうこの人のためだったらなんでもしたると思う。この子の為なら命もいらん、これが親の愛ですからね。この子を守るためやったら俺は死んでもいいと思う。それは親の愛。恋愛においても一緒だ。本当に惚れたら、もうこいつのためだったら俺はなんでもしたると思う。その時に最高に燃える、完全燃焼。それが、一番命が美しいときなんですよ。燃える状態で人生を生き、仕事しようと思ったら、とにかく意味や価値や値打ちや素晴らしさ・すごさを感じないといかん。考えている間はダメ。感じたら燃える。意味や価値や意味を感じる感性を作るために理性を使って考えるんですよ。どんな仕事にも他の仕事には置き換えがたい独特の素晴らしさがある。それに気が付いたとき、俺はこの仕事のためやったらもう命かけてもいい、そういう思いが湧いてくる。そういう風にして不撓不屈の意思っていうものを作っていく。それが人を感動させる。

感性という領域の中での2番目の感動の原理は、愛ですね。人間は深い愛に感動する。強い意思にも感動するし、深い愛にも感動すると。深い愛とはなんなのかって言ったら、自己犠牲的努力をして決して見返りを求めないという愛が無償の愛と言い、そういう愛が人を感動させる力を持つんですね。深い愛とは相手のために努力をして、しかもその相手のために努力することを自分が喜びを感じて、決して見返りを求めないと言う、愛の究極の姿。そういう愛を死ねる愛という。このことためなら死ねる、見返りを求めない。愛の極致、愛の究極の思いは、死ねるって思いですよ。この子のためなら死ねる。この人のためなら死ねる。この仕事ためなら死ねる。この国ためなら死ねる。そこに愛の極致はある。それ以上はない。死んでしまったらおしまいですからね。死ねるという思いで何かをするという、それ以上のものはない。そういう愛が人を感動させる。

みっつ目の感性という領域の中で感性的魅力の3番目は、人間性の魅力。人間性が人を感動させることがある。人間性とはなんなのか？人間性とはどういう構造か。人間性とは性格という格と、人格という格が絡み合って人間性ができてくるんですよ。人間性の中には性格というものもあり、それだけじゃなくって人格っていうものもあって、それぞれが絡み合って、そしてその人間の格、その人の個性ある格を作る。それが人間性。人間性というのは、そういう構造になってる。性格はどんな性格でも個性の表現なので、どんな性格でも、そのまま認めなければならない。どんな性格でも必ず良い面と悪い面がある。性格の悪い面が出てくると嫌われちゃうし、性格のいい面が出てくるとすぐ好かれる。どうしたら性格のいい面が出てくるのかって言ったら、性格のいい面が出てくるっていう、そういう生き方をしようと思ったら人格を磨かないかん。性格っていうのは自然にできてしまうものなんですよ。性格とは気が付いたときにはこういう性格なっちゃってたっというそういうもんなんですよ。性格はなっちゃうもの。自分で作れない。この性格がいやだと思っても、性格は変わらない。変えられない。自分で作れない。性格って自然に出てきてしまうもんで、気が付いたらこの性格になっちゃってた、なっちゃんジュースなんですね。なっちゃってた。

けど人格は自分が努力して作っていくものなんですよ。だから生まれたときには人格はないんですよ。動物学上の分類として人類が生まれてから、人間の社会の中で成長して自ら努力して、そして人格を作っていって成人して人格のある人間になっていく。人格は自分で作るもの、性格は自然にできてくるもの、それぞれが絡み合ってガッチャマンして、人間性ができあがるわけですよ。だから人間性を成長させようと思ったら人格を磨く。人格を磨くと人間は成長する。人格を磨くと性格の良いものが出てきて性格の持ってる悪い面があまり出てこなくなってきて、人格を磨くことによって人から好かれるということになる。そして、人から尊敬されることになってきますね。

では人格を磨くとはどういうことなのか。ちょっと人格を磨くっていうのは、人格には高さ・深さ・大きさというみっつの魅力がある。あの人はなかなか人格の高い人だ、人格が深い、人格が大きい…そういうみっつがある。この高さ・深さ・大きさを求めていくという努力をすると、だんだんだんだん人間は成長して、そして性格が良くなっていって、あまり悪い面がだんだん出てこなくなってくるよう。そうして人間性が輝く、それによって人間性が人を感動させる。では人間性が人を感動させるとは？人格の高さが人を感動させる。別の言葉で言うと高貴なる精神、なかなかあの人は高貴なる精神の持ち主だなと感動する。また、なんて深いこと言うんやったと言って感動する、なんて度量が広い、なんて包容力があるんだ、なんてデッカイ人間なんだと、感動する。これが人を感動させる人間性の原理ですね。人間性において人を感動させようと思ったら人格の高さを追求し、人格の深さを追求し、人格の大きさを求めていく…と言うように、そういう努力をすることによって我々はいろんな人を感動させる、いろんな人から尊敬される、そういう自分を作っていくことができる。これは職業人においても、どうしても目標にしてもらわなければいけない大事な課題であります。

仕事をしながら自分を磨いていく、仕事をしながら自分の人格の高さを磨き、仕事をしながら自分の人格の深さを磨き、仕事をしながら自分の人格の大きさをつくっていく、そういう意識で仕事をするということが、仕事そのものに人間的価値を与えていく、大事な仕事になるわけですね。ただ仕事をしていたのではいけない、仕事をしながら人格を磨くってことをセントバーナード。仕事しながら自分の人格の高さ・深さ・大きさを作って、思いを持って仕事をしてもらいたいと思います。そうすれば理屈を超えた人格の輝きが出てきます。

最後の肉体的魅力もみっつの魅力の要因があります。肉体的魅力の第1番目は、肉体ですから形があるから、だから肉体的魅力の大一番目はプロポーションとか、顔とか外見的な魅力ですね。形あるものはすべて美を求める。肉体というのは形があるので、人間という肉体も美を求めていくという。それをすることによって、人を感動されるという、そういうこのことになって、そのことによって救われることもでてきます。そういう意味では肉体的魅力の第1番目は、容姿の魅力。元々自分が持っているものよりも、自分で磨いていくこと。お化粧をしたり、髪型を整えたり、あるいはファッション、自分に合ったものを着たり、そういうものを全体として容姿という風に言うことができます。そうして自分の魅力を作っていくことも、人間としてする必要があります。

第2番目の魅力は、目の魅力。目の魅力、表情の魅力、態度の魅力。目と表情と態度が人を感動させることがある。人間関係は目で決まる。どういう目で人を見るかによって、その人との人間関係が決まる。見下すような批判するような、責めるような目で見れば、人間関係は壊れる。だけど、相手を尊敬するような、相手を好きだと思うような、相手を称賛するような目で見れば、人間関係は良くなる。人間関係は目で決まる。もっともっと我々は、目を磨いて、目に会いを讃えて、人を見るという…眼力を養っていかないと、人間関係は成長しない。

なんか最近、あいつと具合が悪いなと思うようなことがあれば、それはどこかで相手を見る目に問題があるかもしれません。自分が気付かない内にそういう目になってしまっているかもしれません。もうあいつとは…仲良くやっていけないと、相手から離れていってしまうことも目が原因であったことかも。なんで自分から離れていってしまったのだろうと、それは目が原因であったのかも。これは恋愛関係においてもそう。いろんな人間関係でもみんなそのことが原因として考えられる。自分の目つきは自分では分からない。相手はそれによって傷ついて、相手の方から離れていってしまう。もっともっと目を鍛える、目を磨く、表情を鍛える、表情を磨く、態度を鍛える、態度を磨く、というように、これらも肉体的魅力のひとつとして考えなければなりません。

そういう意味では、映画や舞台に出てくる俳優・役者なんかは、みんなその役柄に合わせて、目を鍛えて、表情を鍛えて、態度を磨くんですよね。単に舞台・映画だけじゃなくて日常生活においても、お客さんに対応する時の自分の目や表情・態度はどうかってことも考えなきゃならないし、同僚と付き合い、上司と関係し、部下と関わるときにもやっぱり自分の目つき、表情・態度を気にして、そのことで自分を成長させようという、そういう思いを持って仕事をすることも大事なまた課題であります。いつも目に愛の光を、いつも目に愛を忘れず、決して目に批判的な責めるような相手を見下すような目をもってしまってはならない。

肉体的魅力の最後の3番目は、立ち居振る舞い。行動の美学です。人間は動物なので、動くっていうことが動物としての最も基本的な生き方であります。動きの中に美を探求するってことも我々は忘れてはならない。スポーツの世界でもいろんなパフォーマンスがあって、バレエとか歌を歌うときでも手の動かし方とか、それが人を感動させることがありますから、そういう意味ではこの行動の美学、立ち居振る舞いの美学も人間的魅力として非常に大事な課題だという風に言うことができます。我々は動きにももっともっと美を追求する。これを仕事の中でも追求していく必要がある。乱雑な醜い動きじゃなくて、あそこの会社に行ったらみんな優雅に美しい動きで歩き仕事をしていた。その会社が人を感動させるような環境をもったってことになりますからね。顔をしかめたくなるような乱雑な荒々しい動きじゃなくて、美を感じさせるようなそういう事務所、会社の雰囲気っていうものがあれば、取引先やお客さんがやってきた場合でも、会社の信用を高めることができるという価値も出てくるわけであります。日本でも昔の武士の社会では、立ち居振る舞いにみんな気を遣って、どこから見ても美しいと言うか、そういう所作をやっておりました。それが今は茶道・華道・日本舞踊として習い事の世界で、活かされておるわけですけど。日常生活においては、我々はそういう武士の社会でやっておったような美しい作法は縁遠くなりました。昔は女性の方が結婚される際に礼儀・作法を習うということもされていましたが、この立ち居振る舞いに美しさがあるということも非常に大事な人間的魅力の要素であります。

悪化した人間関係を修復するために何らかの意味で相手を感動させるという、そういう力が自分にあれば、悪化した人間関係を修復することに大いに役立つってことも考えてみてもらいたいと思います。

それから次はですね第7番目対立を乗り越える実力。悪化した人間関係を修復する実力においては第3番目になるわけですね。第1番目どんな人でも好きになる実力。2番目は誰からでも好かれたい実力。3番目の対立を乗り越える実力が悪化した人間関係を修復するためのメインイベントと言うことができる力であります。

対立っていうのはどうしたら乗り越えられるのか、その実践的方法はなんなのか？対立を乗り越えるためには、まず対立はなんなのか？を考えてみる必要があります。対立とは誰でも考え方が違う、まず違いが対立の原因になるわけですけど。何で考え方の違いが出てくるのか、考え方の違いっていうのは生まれながらに考え方が違うということはありません。ムカついて生まれてくる子どもいませんので。考え方の違うとは、後天的に作られてくるもんなんだと。では、どういう風にして後天的に考え方の違いっていうのは出てくるのか、考え方や価値観の違いっていうのはどうして出てくるのか、ということ考えると、考え方や価値観の違いが出てくる原因が5つあるんです。それは、体験が違うと考え方が違います。経験が違うと考え方が違います。持っている知識・情報が違ったら考え方が違います。物事の解釈の仕方が違ったら考え方が違います。様々な人生における出会いがまた考え方の違いが出てきます。

このように、とにかく、考え方や価値観の違う人間が出てくる原因が5つある。体験の違い、経験の違い…体験と経験って英語で言ったら両方ともエクスペリエンスで片がつくんですけど、日本語で言えば体験と経験では次元が違うんですね。体験っていうのは、自分の肉体が外の世界とか関わった事実のことを体験という。経験っていうのは、その体験から自分が何を学びとったか、経験内容なんですよね。同じことを体験しても、その人の能力は人間性の違いによってその体験から学び取るものは、人間によって個性によって皆違ってくる。だから同じことを体験しておっても経験には違いがあるっていうことですね。知識・情報の違いがあると、考え方は確実に変わってきます。解釈の違いでは、プラスに捉えるか、マイナスに捉えるかによっても変わってきます。最後の5番目は人生の様々な出会いの違い。どんな事件、災害、事故、人間、本などと出会ったか、様々な人生の出会いの違いが人間の考え方や価値観の違いを作り出す原因になります。この5つが違いができてくる原因になります。

考え方が違うということは、相手が自分とは違う体験はしてるんだ。または相手が自分にはない知識を持ってるんだ。または相手が自分とは違う人生の様々な出会いを持ってるんだ。ゆえに考え方や価値観も違ってくるんだと。考えることが同じ人間とばかり付き合ったら楽しいし、自由だし、気楽だけど、成長はしない。同じ考え方を持っているということは、似通った体験・経験・知識を持っていると言えます。

自分にないものを持っている人間と付き合って、自分にないものを相手から学ばないと成長しない。だいたい、子どもが学校に行って成長するということは、子どもが自分が持ってない知識を学ぶということ。先生から色々知識を教えてもらって成長していくのは子どもの成長ですから。自分にないものを学ばないと基本的には成長しない。そこで考えないといけないのは、対立というのは自分がないものを相手が持っていると対立するんですね。自分のしてない体験を相手が持ってたら体験が違うから全然考え方が違ってくる…相手の言うことがわからない…で、相手がなんか言うとむかつく…ということになる。対立するということは、自分にないものを相手が持っているということ。成長しようと自分の持っていないものを学ばないと成長しない。

では、対立とはどういうことなのかと言ったら、自分が成長するために学ばなければならないものを持っている人間が誰であるかを教えてくれる現象のことである。対立を解釈し、理解しなければならない。対立するとは、自分にないもの持っている人間が誰であるか教えてくれる現象なんだ。対立というのは自分が学ばなければならないものを持っている人間が今俺の目の前におるぞということを教えてくれる現象が対立なんだと。理解することによって、我々は対立する相手を敵や嫌なやつやっていう思いで見るんじゃなくて、俺はこいつから学ばないといけないんだと、そういう思いになることができる。これが対立を乗り越えていく力を身につける基本原理なんですよ。

対立というのは自分にないものを持っている人間が誰か教えてくれるもの。自分が成長するために学ばなければならないものを持っているんや。そして、その相手が今俺の前におるんだと教えてくれる現象。我々は対立を経験することなしには、自分が学び取るべき人間が誰なのかを自分で知ることはできない。対立を解釈することが、まずは対立を乗り越えるための実力を作る基本であります。

実際に対立が起こったら何をするか。いったいあいつは俺に無い、何を持ってるんだろ。俺は自分が成長するためにはあいつから何を学んだらいいんだろう、俺は知りたいと。認識力を持って対立の現場に立つことが、次に求められる。

その次に、相手に質問をして、相手に話してもらって相手のことを理解する努力をすること。そうすると、相手はこちらをにらんでいない。対立するという心情を乗り越えている。しかも、こちらも相手から学ぼうという目になり、だんだん対立を乗り越えるという力が自分の中に芽生える。対立が起こったのなら、いったいあいつは俺に無い、何を持ってるんだろう。俺は自分が成長するためにはあいつから何を学んだらいいんだろう、俺は知りたいと。認識力を持って、その場に立つ。そして、なんで相手がその気持に至ったのかを知る努力をすることが対立を乗り越える実践であります。

今度は、実は、私は自分のことを相手にわかってもらう。考え方が違っても、お互いがなんでそういうことになったのかをわかってくるから、なるほど、そういうことでそうなったのね、と。相手の考えを認めることになって、考え方は違っても分かり合えるから協力ができる。これパートナーシップ。同じ考え方の人間が二人おってもパートナーシップじゃないんです。パートナーじゃない。パートナーとは違う考え方、違うものを持っている人間が協力することをパートナーシップという。考え方が違っても一緒にやっていける、それは相手が足らないところを自分が補ってあげよう、自分が足らないところを相手に補ってもらおうと。それがパートナーシップ。夫婦もパートナーでしょ、パートナーって男と女が一緒になって協力していく。会社であってもそう、考え方が違っても、分かり合えるから一緒にやっていける…そういう力ができてくるわけです。これが対立を乗り越える力です。対立を恐れてはならない、対立こそ自分が成長するチャンスだと、そう捉える必要があります。

次は、問題解決能力を作る。問題解決能力、どんな問題でも恐れない、どんな問題でも自分の力でそれを乗り越えていけるっていう、そういう能力を作っていく。それはどうするか、問題解決能力を作る…そのためには、問題っていうのは、自分を苦しめるために出てくるんじゃない、問題や悩みは自分を成長させるためにのみ出てきてくれてるんだってことをまずちゃんと抑えることですね。なぜなら問題も悩みもなかったら人間は成長しないんだ。問題も悩みもない会社は発展しない。問題や悩みがあって、それを解決していくから会社も成長し、人間も成長するんだ。問題や悩みは人間を成長させるために出てくる。問題や悩みは会社を発展させるために出てくる。問題や悩みは社会を発展させるために出てくるという、問題に対する理解をまずちゃんと抑えることですね。

問題は自分を成長させるために出てきてるんだ。だから俺を成長させるものだから、それから逃げてどうするんや。どういう風にすれば問題を乗り越えていくことができるのか。問題を感じるのは感性ですけど、問題を解決するのは理性なんですよ。理性で問題を解決しようと思ったらどういう理性の使い方をセントバーナードか。それを考えないといけない。

理性能力っていうのは、客観性と普遍性の能力と言えます。理性という能力は、物事を外から客観的に見ることによって、その問題を解決することができる、そういう能力なんですよ。物事を外から見る立場を与えてあげないと理性は答えを出せないんですよ。だから問題や悩みを持って、問題や悩みのどつぼにはまっても、そしてどんなに考えていても、ますます苦しくなるだけで答えは出ない。答えを出そうと思ったら、問題や悩みから外へ出て、外から問題や悩みを眺めてみるという立場を与えてあげないと、理性は答えが出せない。そういう限界のある能力が理性。

例えばの話が、深い森の中に迷い込んでしまった場合に、その森から早く出ようと思ったらどうしたらいいのか。森の中に入ってる状態でどうしたらいいかなと思って、あっちに行ってみる、こっちが良かったと、そんなことを考えていても、結局・薬局・郵便局で、途中で野垂れ死にしてしまうことになってしまった。どうしたらその森から早く出る帰る道がわかるのかって言ったら、一番高い木のてっぺんから森全体を外から眺めたならば、いっぺんに答えが出るわけですよ。これが理性の正しい使い方。森の中にいるのではなく、森の中の一番高い木に登って、てっぺんから眺めて、そこにおるんやって分かったら、すぐ出るわけだ。これが正しい。探しているだけでも死んでしまうのではとか、高い木に登れるのかなどは置いておいて。とにかくは方法論としては、一番高い木から森を眺めることが正解の方法。これが正しい理性の使い方。人間が問題や悩みを持ったならば、持ちながら考えてはいけない。もし他人の問題や悩みだとしたらと考える。俺にどうしたらいいかと相談されたら、俺はその人にどう答えてやることができるだろうかなと考えたら、必ず正しい答えが出るんですよ。

自分が悩みながら考えて、悩みのどつぼにはまっていて考えていては、答えは出ない。他人から相談されたら、こうしてみたらいいんじゃないって言えるんですよね。これが問題解決能力を作るという方法。理性は物事を外から眺めてみないと答えを出せないという能力なんですよ。どんな問題でも、会社の経営の問題でも、人間関係の問題でも、どんな恋愛の問題でも、どんな問題でも他人ごとにすること。他人から相談されたら、俺はその他人にどう言ってやるだろうかと思ったら、もうだいたいハタチを超えた大人なら自分ならこう言ってやるだろうなって出てくるんですよ。一回でうまくいくことはないと思いますけど、それを何回も、何回も繰り返して相談されたら、俺はどう言ってやるだろうかと、自分ならこう言ってやるだろうと思うこと…そういったことを自分でやってみる。自分でやってみたら、状況は動く。状況が動いたら自分の置かれている状況がはっきりわかってくる。この状況でまた相談されたら俺はどう言ってやるだろうかと考える。それを繰り返すと、必ず問題に答えは出るんですよ。この理性の使い方を覚えたら、人生に怖いものはない。どんな問題でも向かっていける。他人ごとにしたらね。自分で悩んで、もうどうしようもなくなって、友達に弱音を吐いても、友達は死ねよとは言いません。待てよと、死ぬ気になったらやれるやないかと。他人事にした場合の答えなんですよ。しかし、自分事になったもう死ぬしかないと思っちゃう…。客観的に外から悩みや問題を見たときの答えなんですよ。どんな問題でも悩みでも乗り越えられる。それはなぜか、それはどんな問題でも答えがあるんですよ。答えのない問題はないんですよ。本当の悩みとは、今自分の持っている力でどうしようもない、万策尽きたというのが本当の問題なんですよ。そういう問題っていうのは何で出てくるか、それはその問題が、実は母なる宇宙が自分を成長させるために自分に与えてくれる人生の課題なんです。今の自分でなんともならんという問題が与えられて、だけどなんとかそれを乗り越えようと努力すると、命から潜在能力が湧いてくる。命から湧いてくる潜在能力が問題を乗り越えさせてくれて、人間は成長していくんだ。命から湧いてくる潜在能力は、生まれながらに母なる宇宙から与えられる潜在能力、遺伝子だと。その遺伝子が答えとして湧いてきて、その問題を乗り越えさせてくれる。問題も答えも母なる宇宙が与えてくれる…問題は出てくる以前から、答えはあるんだ。問題は答えを引っ張り出すためにある。だから、諦めなかったら、答えは必ず答えが湧いてくる。そういう構造に命はなっている。

なんで、自分の力でどうしようもない問題が母なる宇宙が自分を成長させるための問題と言えるのか、それは母なる宇宙は、自分が産んだ命を進化させるために何をするか。母なる宇宙は環境の激変ということを与える。全生物が絶滅するかもしらんというほどの大きな問題だ。しかし、それがなかったら進化しない。だからガラパゴス諸島の生物達は環境が変化しないから、何万年前と同じ命の形をそのまんま東で引きずって今日（こんにち）を生きている。

環境が変化しないと、生命は進化しない。環境の激変という大きな問題で生命は変化、進化する。環境の激変も母が子に与える試練。自分にとってどうしようもないって問題も、それはやっぱり母なる宇宙が自分を成長させるために与えてくれた愛の試練として受け止めなきゃならない。そういうどうしようもない問題を与えられても、なんとか乗り越えようと努力をしていると、命に潜在する能力が出てくる順番がくる。そして、生命に潜在する能力が湧いてきて、その問題を乗り越えさせてくれて成長していくわけだ。

問題が出てきた時には答えはあるんだ。答えのない問題は出てこない。そういう構造になってるんですよ。人生どんな問題にぶつかっても諦めたらいかん。必ず全部乗り越えられる。そうそう信じていれば、早く答えが出るんですよ。乗り越えられるかもしらんけど、乗り越えられられないかもしれないと、不信があったら答えは出てこないですよ。信じないと答えは出てこない。絶対答えはある、答えは出てくると。絶対問題は乗り越えられると信じられたら、早く答えが出てくるんですよ。これが信という力の強さです。信じれば救われるんですよ。信じれば扉は開かれるんですよ。だから、人類は生きるために最初に何を作ったか、原始宗教。信じるって力を作ったんですよ。そのことによって人類は勇気をもって生きていけるって言うことになったんです。みんなから不信な目で見られたら生きていけなくなってしまう。みんなから信じる目で見られたら生きる力が湧いてくる。不信の目は殺す目だ。信じる目は生かす目だ。目ほど恐ろしいものはない。信じれば必ず道が開けてくる。

どんな問題でも乗り越えられる。そのことを本当にちゃんと根拠を持って理解していただいたら、強い生き方ができる。どんな問題が出てきてもへこたれない。必ずなんとかうまくいくという、そういう自信を持った生き方できます。

だけど人間は不完全だから、自分一人の力ではなかなか問題の解決ができないってこともあるかもしらん。その時には、3人寄れば文殊の知恵。自分とあと二人の人間を探してきて、問題を乗り越えるために必要な力を持ったあとふたりの人間の力で問題に挑戦して行ったら必ず問題を乗り越えられる。これが三人寄れば文殊の知恵という仏教の言葉の意味なんですよ。

なんで3人なのか、それは社会っていうのは一人称二人称三人称という視点で成り立っている。現実というのは、自分の目から見たらこう見える、相手から見たらこう見える、第三者の目から見たらこう見えると、三つの視点を統合することによって、生きた現実が見えてくるし、仏の知恵に近づくことができると言われることがあります。だから自分一人でどうしようもなくなったら、あと二人の人間の力を借りてもいいんだ。ただし、相手に丸投げするんじゃなくて、自分も関わって3人の力で協力して問題を乗り越えていく。これが最終的な人生の問題の解決の仕方であります。この力をものにしたら、人生もう怖いものはない。何者も恐れずに、生き抜いていける。

最後の5番目は、捨てる勇気。どうしようもなくなったら最後は捨てるしかない。命を捨てる。捨て身になる。相続でもめて、もらわんといかんとか言ってると、揉めるんですよ。もういらないと言って、捨てる勇気で捨てると問題から逃れることができる。捨てる勇気が最終的に物事を解決するということが人生の仕方があります。戦国時代にできた言葉で死を必すれば即ち生き、生をこうすれば即ち死す。必死になったら生きる道が開けてくる。だけど、自分だけは助けたいと思って、自分だけは助かりたいと思って作為を労するとかえって死んでしまうっていう。理性的に作為的なことをして自分だけ助かろうと思ったらかえって危なくなってしまって死んでしまう。捨て身になって、どうなってもいいわと思って、必死で生きていたら生きる道が見えてくるという、捨て身になったら助かるということもあります。

我々は生まれたときから裸一貫、だからもう何もいらんと、ゼロからでも出発できると言って、そういう気持ちですべてを放棄すれば、助かる道、生きる道が見えてくるという、そういうことも人生ではありますので、考えておかねばなりません。

最後の最後で問題を解決する、悪化した人間関係を修復するためには、みんな人は好かれたい、みんな心が欲しいんだということも忘れてはならない。敵も好かれたいんだ、敵も分かってもらいたいんだ、認めてもらいたいんだと、その気持ちを持って対立しているんだってわかってあげて、好きになったら対立を乗り越えられるという最終的な気持ちも人間は持っていないと悪くなってしまった人間関係を修復するという力を成長させていくことはできません。

とにかく悪くなってしまった人間関係をどうしたら修復できるのかということを中心にして、人間関係の問題を乗り越える方法をお話をさせてもらいました。どうもありがとうございました 。